

題目 資源分配と社会的選好：当事者および第三者状況における実証的検討

氏名 渡辺 恵理子

指導教官 亀田 達也

人は不公平な結果よりも公平な結果を好む。この公平性の概念は、社会心理学などの分野だけでなく、近年では経済学においても注目されるようになってきている。そのきっかけともなったのが、最後通告ゲーム (Guth, Schmittberger, & Schwarze, 1982) における受け手の拒否行動である。自己利益に反してでも不平等分配を拒否する理由として、Fehr & Schmidt (1999)は、不平等回避選好モデルを提案した。このモデルは、自分が他者よりも多くの富を得ている (advantageous inequality) 状況での不効用  $\beta$  (guilt) と、自分が他者よりも少額しか得ていない (disadvantageous inequality) 状況での不効用  $\alpha$  (envy) から成り、人々はこれらの不効用を減らすために、コストをかけてでも利益の格差を減らす行動を取るということが説明されている。この Fehr-Schmidt モデル以降、多くの不平等回避モデルが提案された。それらをまとめ、一般化した Charness&Rabin(2002)のモデルは、自他間の分配問題において大きな説明力をもつモデルとして、様々な分野で実証研究がなされている。

このように、自他間の分配における社会的選好に関して多くの知見がある一方、その心の基盤や第三者への分配に関しては、これまで組織的に検討されていない。こうした背景を受けて本研究では、自他間の分配問題、第三者への分配判断の両者が相互にどのような関係性にあるか、また心理学の研究において、従来から人々の公平性の判断と関係すると考えられている、心的要素としての共感性と不平等回避モデルとの関連などを検討するために、当事者および第三者状況における分配課題に加え、共感性尺度を含む事後質問課題を、実験室実験で行った。被験者には、当事者課題においては自分と相手とのお金の分配の組み合わせを、第三者課題においては自分とは無関係な他者間のお金の分配の組み合わせを 2 つずつ提示し、どちらかを選択させた。また両課題において、選択した金額がそのまま手に入る “gain 条件” と、選択した金額が取り分から差し引かれる “loss 条件” を用意し、それぞれの行動パラメーターを推定した。

実験の結果、当事者分配と第三者分配との間に一貫した関係性は見られなかったものの、個別のパラメーターと共感性との関連など、これまで検討されてこなかった行動パラメーターと心理要素との関連が見られることが分かった。今後、複数の分配状況に通底する心的メカニズムを検討することは、心理学研究のみならず、実験ゲーム研究全般にわたって喫緊の課題であると考えられる。